

国際貢献で 培われた力を いざ、和歌山で

青年海外協力隊

検索 

<http://www.jica.go.jp>

独立行政法人 国際協力機構 (JICA) 関西国際センター
〒651-0073 兵庫県神戸市中央区脇浜海岸通1-5-2
Tel: 078-261-0341 (代) Fax: 078-261-0357



その経験を和歌山で活かし その経験を日本の未来へつなげる



青年海外協力隊として、国を越え、人種を超え、異文化の下で活動してきた若者たち。新たな一步を、ここ和歌山で踏み出している6人のOB、OGを訪ねた。彼らを受け入れているのは、自然豊かな「紀の国」和歌山。持ち前のタフさ、赴任先での苦勞をバネにして培われた創意工夫力、問題解決力をそれぞれの職場で発揮している。彼らに共通しているのは、心の強さとチームで活動できる柔軟性。国際貢献の経験は今、和歌山での社会貢献につながっている。グローバルな視野をもち、人間味あふれるOB、OGの活躍ぶりをその目で確かめてみてください。



目指すのは、
町の人々を愛し
同じ目線で考える行政マン

赴任地 **コスタリカ**

和歌山県・那智勝浦町
那智勝浦町職員

田中 宏幸さん



間伐で森を健やかに。
日本の山を森を
この手で守りたい

赴任地 **ジブチ**

和歌山県・日高川町
有限会社原見林業勤務(林業)

大野 愛美さん



6次産業の強みを活かし
みかんと加工品の
国内外の営業活動に奔走

赴任地 **タイ**

和歌山県・有田市
株式会社 早和果樹園勤務

大浦 靖生さん



保育の現場で
グローバルな体験を伝え
子どもたちの視野を広げる

赴任地 **モンゴル**

和歌山県・和歌山市
社会福祉法人 岡崎保育園勤務(保育士)
和歌山博愛会

山崎 友美子さん



夢は、ペルーの
研修生を受け入れ
日本の農業技術を伝えること

赴任地 **ペルー**

和歌山県・紀の川市
自営業(桃農家)

森端 修平さん



生きていく上での
たくましさ
子どもたちに伝えたい

赴任地 **セネガル**

和歌山県・和歌山市
藤戸台小学校勤務(教諭)

新江 涼加さん



目指すのは、 町の人々を愛し 同じ目線で考える行政マン

田中 宏幸さん
たなか ひろゆき



赴任地

コスタリカ

赴任地での職種(活動分野)

環境教育

和歌山県・那智勝浦町
那智勝浦町職員

大学を卒業後、民間企業に勤め、その後、協力隊員としてコスタリカへ赴任。帰国後は地域おこし協力隊として、2011年の紀伊半島大水害で被災した和歌山県那智勝浦町色川地区で活動。2014年4月から同町に勤務。

町と住民の架け橋に。 志高く町職員に

紀伊半島南東に位置する人口約1万6000人の那智勝浦町。豊かな温泉に恵まれた県内有数の観光地で、マグロや伊勢海老でも知られている。田中宏幸さんは、ここ那智勝浦町に昨春から勤務し、総務課でふるさと納税、統計調査などの業務に携わっている。「勤める前は、地域おこし協力隊として町内の色川地区に赴任しました。地域活性

化の手伝いなどをするうちに地域と行政との距離感を感じ、ならば自分が住民と行政の架け橋になりたいと思い、町の職員を志望しました」。

那智勝浦町に来る前、田中さんはコスタリカのカルタゴ市で2年間、青年海外協力隊として活動していた。目的は、ゴミ処理などの環境問題について住民意識を高めること。「ですが、低所得者層にとっては、環境よりも日々の雇用のほうが重要という傾向もあり、コミュニケーション不足もあって思うように進

みませんでした」。そうした中で実感したのは、自分のやりたいことを相手に伝えていくことの大切さ。「何度も説明をして手を差し伸べると、少しずつ周囲の態度も軟化。あきらめずに続けることの大切さを学びました」。

帰国後、田中さんは地域おこし協力隊

忍耐強さを学んだ 協力隊での活動



日々の業務では、上司や同僚との打ち合わせや確認が大切。

として同町の色川地区に入り、今も住み続けている。「色川地区は標高250～400mにある約500世帯の集落。湧き水が美味しくて、薪で炊く風呂も気持ちがい

いい。人々も温かく、住んでいて幸せになります」。行政の仕事に就いてからも、何においても地区の人たちの顔が思い浮かぶようになったという。「色川のことは他人事ではない…という気持ちです。これからはこの思いを那智勝浦町の全域にも広げていきたい。住民に寄り添うことで初めて、よい施策も提案できるのではないのでしょうか」。

そして田中さんは、「協力隊の活動は帰国して終了ではありません。今まさに協力隊での経験を活かす活動が始まったところです」と胸を張る。その

色川地区の経験を生かし 顔の見える施策づくりへ



パソコンに向かって事務処理をすることも多い。

姿は、日本に戻った協力隊員たちが各地でその行動力を発揮していることを物語っている。

上司に
聞く!



那智勝浦町総務課 副課長 矢熊 義人さん

和歌山市、いわば都会出身の田中さんは、町内出身者が多い職員の中では異色の経歴。今は集落に溶け込み、町とのパイプ役も務めてくれています。これからは、海外での経験も活かして、広い視野を持った職員になって活躍してもらいたい。

現地の活動で大事ななのは 人々のやる気を引き出すこと



環境教育の一環で、子どもたちと一緒にゴミ拾いを実践。

青年海外協力隊に参加する前、田中さんは廃棄物処理の会社に勤めていた。「日本はゴミ処理問題について昭和50年代から取り組んできた経緯から、廃棄物リサイクルの技術が進んでいます。ここで得た技術を、環境問題を抱える諸外国で生かせればと思い、協力隊に

応募しました」。ところがコスタリカに行ってみると、予想以上に環境問題への意識は低く、ポイ捨てが普通で分別も知らない状況。活動は、ゴミの分別と処理について啓蒙するパンフレットづくりとその教育を中心にしたそう。現地で学んだのは、単に外部の人が来て環境を守るわけではないということだったという。「環境を守るにはそこに住み、一緒に問題を考えて初めて理解が高まります。大事なものは、そこで暮らす人たちがやる気を出して、こうしていきたいという気持ちを持つこと。それを支援するのが活動だと実感しました」。



環境の授業では、子どもたちにゴミとその捨て方を一から教えた。



青年海外協力隊を目指すみなさんへ

真剣に取り組めば 辛いことも前向きに考えられる

赴任先の国の人からすれば、協力隊員はよそ者です。時には、厳しい言葉をかけられることもあります。めげずに乗り越えてほしい。中途半端な気持ちでなく真剣に取り組めば、自ずと辛いことも前向きに考えられるはず。「やりきる気持ち」をもって挑んでください。

間伐で森を健やかに。 日本の山を森を この手で守りたい

大野 愛美さん

おおの あみ

赴任地
ジブチ

赴任地での職種(活動分野)
植林

和歌山県・日高川町
有限会社
原見林業勤務(林業)

大学で林業を学んだ後、植林を目的に協力隊に志願しアフリカ東部のジブチへ。帰国後は、国の「緑の雇用制度」を利用して研修を受け、2014年春、和歌山県日高川町の森林管理会社に就職。林業家を目指している。

ふと見上げる 森の豊かさが 仕事のモチベーション

「山に入ると季節を感じるんです。木々の芽吹きとか、ホトトギスの鳴き声とか…。爽やかに話す大野愛美さんは、協力隊員として2年間、アフリカ・ジブチで植林の技術指導をした後、日本に戻り林業家を目指している。「ジブチで活動した時に、日本がどれだけ恵まれた環境なのかを実感しました」と大野さん。海外に目を向ける前に、ま

「山に入ると季節を感じるんです。木々の芽吹きとか、ホトトギスの鳴き声とか…。爽やかに話す大野愛美さんは、協力隊員として2年間、アフリカ・ジブチで植林の技術指導をした後、日本に戻り林業家を目指している。「ジブチで活動した時に、日本がどれだけ恵まれた環境なのかを実感しました」と大野さん。海外に目を向ける前に、ま

ずは荒廃が進みつつある日本の森林を守りたいと決意。「山と森を健やかにすれば、昨今の土砂災害も防げる」と力を込める。

帰国後、大野さんは林業の新規就業を支援する「緑の雇用」制度を利用し、研修を受けた後、和歌山県日高川町にある原見林業に就職した。紀伊山地を有する和歌山県は森林蓄積量も高い。目下の仕事は、間伐や下草刈りなどの育林、そして間伐材の出荷準備などが中心だ。小柄な大野さん、体力的に大

和歌山県山間部へ1ターン。 一人前になるには最低3年

丈夫なのだろうか。「これから日本の林業を支えていくのは、彼女たちのような志のある若者たち。林業は力仕事のイメージがありますが、むしろ必要なのはチームワーク。周囲を見計らって作業ができる大野さんのような人を求めています」と、原見林業の代表・原見健也さん。

大野さんは今、近くの小さな集落に住んでいる。女性、それも山の仕事と聞いて、集落の人はみんなびっくりしたそう。限界集落といわれる地区に一緒

に暮らす若者がいることは、それほど地域の人々を明るくし、自信をもたらすことか。

「空気も水も美味しくて、ここから離れられません。ジブチで学んだのは、常識にとられないこと。住んでみないと分からない良さがたくさんあります」と笑顔を見せる。「山にどっぷりと浸かって仕事ができるのは幸せ。多くの人に、山に『生業』があることも知ってもらいたい」とはいえ、檜や杉の針葉樹が木材として適するには40年以上の年月がかかり、すぐに答え

が返ってくる仕事ではないだろう。「先は見えません。ですが、まずは自分が一人前になってそこから、山や森を守る大切さを伝えられるのではないかと考えています」。清々しい表情の奥に、しなやかさと強さを秘めている大野さん。林業家を目指して踏み出した一歩を、山も森も見守っているようだ。

夢は山の仕事を情報発信し 森の荒廃を食い止めること



間伐中の斜面を見ながら、間伐するポイントを原見社長に聞く大野さん。



土場で製材所に出荷する木材の仕分け。「元玉」と分かるよう檜の表面をチェーンソーで削る。

上司に
聞く!



有限会社 原見林業 代表取締役 原見 健也さん

大野さんは「勤」がいい。山の仕事は仲間と共同で作業するので、周囲とアイコンタクトで進めることも多い。彼女なら十分にやっつけてくれる。それに愚痴も言わない。アフリカの砂漠で辛抱した経験があるからかな。林業家として世界へ羽ばたいてほしいですね。



青年海外協力隊を目指すみなさんへ

現地のことは 行ってみなければ分からない

「協力隊の参加にためらう人もいるかもしれませんが。私も社会経験がなくて参加したので不安でした。でも、例え何かあったとしても、現地の状況に合わせて考え、自分で解決するしかありません。自分の持っている力を信じて、一歩踏み出してみてください」

日本の常識は通用しない。 気づかせてくれた貴重な経験

学生の頃から「海外で植林をしたい」と夢をもっていた大野さん。協力隊に参加し、アフリカのジブチへと向かったが、厳しい現実に直面したという。「実際に行ってみると、まず砂漠地帯で樹木を根付かせることが難しい上に、遊牧民の人々に植物を育てるという意識がありません。自分の無力さを目の当たりにしました」と、協力隊のことを語る。日本で「普通」と思っていたことは、世界では通用しないことを実感。そこで大野さんは、植林だけにこだわらず、幅を広げて活動したという。農業組合で農地での樹木の活かし方について講習したり、小学校で植物や樹木の必要性に



ジブチの子どもたちと植物を植える。土いじりは初体験という子どもがほとんどだった。

ついて授業をしたり、そして学校菜園も。「まずは『植物は育てることができると知ってもらうことから始めました。自身のこだわりから抜け出し、物事の本質を考えていこうと思い始めた大野さん。その結果、日本の自然環境のありがたさに辿り着いたという。

6次産業の強みを活かしまかんと加工品の国内外の営業活動に奔走

大浦 靖生さん

おおうら やすお

赴任地
タイ

赴任地での職種(活動分野)
果樹

和歌山県・有田市
株式会社早和果樹園勤務

みかん農家の5代目に生まれ、大学で果樹について学んだ後、協力隊に応募。タイで果樹栽培の指導にあたる。帰国後の2002年から、和歌山県有田市にあるみかんの生産・加工・販売をする株式会社早和果樹園に勤務。営業部長。

440年の歴史あるみかん産地 地域産業への貢献も目指す

急峻な斜面に広がるみかん畑。和歌山県有田市は、全国一のみかん生産量を誇る和歌山県のトップクラスの産地だ。市内出身の大浦靖生さんは、大学卒業後すぐに協力隊としてタイ北部の山村に赴任。果樹栽培のほか、村人に梅干しの加工を一から指導した経験をもつ。帰国後の2002年、同市の株式会社早和果樹園に就職し、加工品開発、

販売ルートの開拓などに従事してきた。「有田地域にみかん農家は約2000戸あります。加工用として高く買い取ることができれば、農家に安定した収入をもたらすことができ、僕らの加工品製造が地域産業の一助になれる。産地の使命だと思って取り組んでいます」。

最初に加工品として作った「味ーしぼり」は、有田みかんを原料として搾った100%ストレートジュースだ。味に自信はあったが、販売ルートは一から開

小粒みかんは安値。だが加工すれば味わってもらえる

拓しなければならない状況だった。百貨店やホテルなど味に厳しいバイヤーに「初めてのおいしさ」とその味を評価してもらい、自信をもって販売することに。「僕の場合、協力隊で同じような経験がありま



斜面いっぱいに広がるみかん畑。早和果樹園が所有する畑は約6ha。

す。断られても挫けない根性が備わったのかもしれません」と大浦さん。当初400本作った商品は、年に5万本を製造するまで成長。生産、加工、販売のノウハウを社内ですべて集約し、新商品を送り出

している。また、小粒ゆえに青果市場には出荷できないみかんも、まるごと瓶詰して売出すと、こちらもヒット。こだわり抜いた商品は、全国のみかん好きを魅了している。

「有田みかん」は今、少しずつ海外進出もしている。ようやく、台湾や香港の市場で「みかん」で通じるようになった。「今後は『みかんと言えば和歌山』となるよう、県や農協と協力して『オール・ワカヤマ』でみかんの品質をアピールしていきたい」と語る大浦さん。物怖じせずに着実に攻めゆく営業姿勢は、地域に根ざした協力隊の活動にどこか重

「有田みかん」を世界へ。地域一丸となって海外に挑む



「清美オレンジ」の撰果。S~3Lの大きさは撰果機、等級は人の目で分ける。

なる部分もあるのだろう。日本の消費者を唸らせたジュースも、やがて海を超え世界中にファンを広げていくに違いない。

同僚に聞く!



株式会社早和果樹園 生産部長 松本 将輝さん

お互い、みかん農家の長男で小さい頃からの仲間です。大浦は、人あたりもソフトで話も上手い。ぼくらの商品を海外に売り出す時も、経験があるから物怖じせずに行動してくれる。社内の呼び名は「スーパー営業マン」です。

村人に梅干しづくりを指導 負けん気根性も備わった

タイの最北端、標高1000mの山岳地にある小さなルワムジャイ村。大浦さんが赴任した先だ。主な活動は落葉果樹の栽培指導だが、加工分野でも何かできないかと模索し、梅が栽培されていたことから、衛生面でも加工しやすい梅干しに着目。試作品をバンコクの食料品店のバイヤーに試してもらおうと、予想以上に高く評価してくれた。手応えを感じた大浦さんが、村人は「こんなに酸っぱいものが売れるのか」と半信半

疑。加工することで生よりも高値が付くことを根気よく伝え、協力してくれる農家を募集。23軒の農家が手を挙げた。「しんどいことばかりだった」と当時を思い出す大浦さんが、現地の人は「いろんな国の支援が入ったが、ここまで本気でやってくれる人はいなかった」と語ったそうだ。後にこの梅干しは、タイの「一村一品運動」の最初の認定品に。村人にどれほど誇りをもたらしたか、計り知れない。



収穫した梅を1粒ずつ確認。無添加の梅干しづくりは手作業で進められる。



青年海外協力隊を目指すみなさんへ

百間は一見にしかず。人生の貴重な2年間に

「協力隊に参加しなかったほうが良かったと思うことは、一度もありません。人生の中で、代えがたい濃厚な2年間となりました。まずはやってみることが大切。日本人一人で現地の人たちと何かを進めていく活動は、自分の力を試す良い機会になるでしょう」

保育の現場で グローバルな体験を伝え 子どもたちの視野を広げる

山崎 友美子さん

やまさき ゆみこ



赴任地

モンゴル

赴任地での職種(活動分野)

幼児教育

和歌山県・和歌山市

社会福祉法人和歌山博厚会
岡崎保育園勤務(保育士)

和歌山市内の公立保育所で非常勤保育士として勤務。2008年に一念発起し、ボランティアで海外に出たいと協力隊に参加。モンゴルの国立幼稚園にて活動。帰国後は社会福祉法人和歌山博厚会に就職。2014年春から新設の岡崎保育園勤務。

世界の子どもを楽しませる 昔ながらの手遊び、わらべ歌

2014年春に開園した和歌山市内の民間保育園・岡崎保育園。約70名の園児が通うこの園で中堅保育士として活躍する山崎友美子さんは、5歳児クラスの担任。2008年、協力隊の活動でモンゴルに幼児教育で赴任した経験をもつ。「子どもはやって楽しいこと、できてうれしいこと、そして認めてもらうことで次の意欲につながります。これはモ

ンゴルでも同じでした」。手遊びやわらべ歌、紙芝居など日本独自の幼児教育を現地で実践。音やリズムが子どもたちの心に響くことを実感し、今も保育の現場で活かしている。

モンゴルでは、現地のニーズと活動がすれ違うことも多かった。日本の情操教育を導入するという建前と、評価されない教育に興味がないという本音と…。「ある意味、モンゴルの人は教育に熱心すぎるのかもしれませんが。子ど

もが描いた絵が下手であれば、先生が描き直してしまう」。そこで、何度も「上手にできることだけでなく、過程も大切」という自分の考えを伝え、相手の言い分を聞き、苦労して折り合いをつけたそう。 「モンゴルから戻ると、まずは相手を受け



4・5歳児に絵本『おだんご ころころ』の読み聞かせ。子どもたちは真剣に聞き入っている。

もが描いた絵が下手であれば、先生が描き直してしまう」。そこで、何度も「上手にできることだけでなく、過程も大切」という自分の考えを伝え、相手の言い分を聞き、苦労して折り合いをつけたそう。 「モンゴルから戻ると、まずは相手を受け

モンゴルで身に付けた 言葉や伝達方法の引き出し

入れるという姿勢が身に付いていました」。以前は、子どもが悪いことをした時はそれを分からせようとしていたが、今は、まず子どもの言い分を聞き、なぜいけないかを本人に気づかせるように促しているという。

「最近では内向きの人も増えています。自分の周りだけでなく、視線を外に広げてほしい」と山崎さん。折に触れ、子どもや後輩の保育士に、自身のモンゴルでの体験を語り、伝えているそう。そうした中で、自分が暮らしている地域や国により愛着を持ってもらいたいという願いもある。また、

上司に
聞く!



社会福祉法人 和歌山博厚会 岡崎保育園 園長 岡田 由香さん

公立保育園で非常勤講師をされていた山崎さんは、経験も豊富で、若い保育士たちをまとめてくれる心強い存在です。現場の声を吸い上げ、中心となって行事も推進。ボランティアの経験は、人との関わり方で活かされているのでしょうか。

「人間らしさ」を改めて考え 子どもたちを見守る



カタログを見て、春から使用する室内用具を園長、同僚と検討する山崎さん。

「遊びから学ぶ」 日本の幼児教育を感じてもらった

モンゴルの首都ウランバートルにある国立幼稚園で幼児教育の指導に携わった山崎さん。週単位でクラスをまわり、制作・音楽・体操などを教え、現地の先生に見てもらった。「遊びを通して楽しみながら身に付けるという日本の幼児教育の良さを感じ取ってもらいたかった」と話す。制作は絵画、ハサミを使う工作、芋版画、小麦粉粘土など。自分の手で作り上げる楽しさに子どもたちは目を輝かせ、「次は何をするの?」と待つほどに。それまで距離を置いていた現地の先生たちも、子どもたちの様子を見て関心を持ち、授業に参加することも。「少しずつですが、現地の先



ジャガイモを削って、絵具を塗って、ペタン。芋版画に挑戦する子どもたち。



青年海外協力隊を目指すみなさんへ

2年間は人生の通過点 価値観も変わる

「協力隊への参加は、特別なことではありません。けれど、そこから人生も考え方も変わります。つまり、そこにあるかもしれないが、経験したことはきっと、その後の人生に凝縮されていきます。思い立ったが吉日。興味があればぜひ参加してみてください」



モンゴルの幼稚園は2歳児からあり、午睡の時間も。

生方が感じてくれているのが分かりました」。また、授業のはじめに毎回、手遊びや歌を取り入れていると、いつしか子どもも先生も鼻歌を歌うように…。 「活動が終わっても、ここで歌や手遊びが続けられると感じました」。山崎さんが残したのは、素敵な遊びの心だ。

夢は、ペルーの 研修生を受け入れ 日本の農業技術を伝えること

森端 修平さん
もりばたしゅうへい



赴任地
ペルー

赴任地での職種(活動分野)
環境教育

和歌山県・紀の川市
自営業(桃農家)

大学を卒業後、事務職の経験を経て、青年海外協力隊に応募しペルーへ赴任。廃棄物の最終処理施設建設の前段階として、ゴミの分別回収を実施。帰国後は、和歌山県・紀の川市にある実家の果樹園を受け継ぎ、桃づくりをスタート。

「あら川の桃」2年目。
まずはしっかりと桃づくり

「青年海外協力隊の活動で大きく変わったのは、自分のアイデンティティを改めて実感したこと。それまでは、引き継ぐつもりのなかった実家の桃づくりを『やってみよう』という気持ちになりました」と、爽やかに話す森端修平さん。ここ紀の川市桃山町は、和歌山県北部にある桃の産地。「あら川の桃」で知られている。「始めたばかりなのでまだ大変なこ

とばかり。大きなことは言えませんが、今後は、地域の農家さんと意見や知識を交換して、ハードやソフトの部分で共有していきたいと考えています」。長年農業に従事してきた人たちは、突然の申し出に目を丸くするかもしれない。それでも、「自分から弱みを伝えて、分からないことは素直に聞く。そうすることできっと協力し助け合えるでしょう」。その考えは、協力隊としてペルーに赴任した時に得た、相互理解の考えだと森端さんは教えてくれる。

急がず慌てず一歩ずつ 動じない精神はペルーで

「今の仕事が協力隊と違うのは、2年という任期に縛られないこと。年月のかかる果樹栽培に長いスパンで取り組めます」と森端さん。桃の樹は3年で実を付けるが出荷には至らず、7年目



両親から受け継ぐ樹齢15~20年の桃の樹。目標は除草剤はもちろんのこと、極力無駄な農薬・化学肥料を使用せずに育てること。

でようやく収入につながるそう。とはいえ、「母から『もっと急いで…』と忠告を受けることも」と苦笑い。「スペイン語で『ポコ・ア・ポコ』という言葉があって、少しずつゆっくりという意味があり

ます。どんなことも1歩ずつでしか進めないことを言い表しているのだと思います」。その言葉があるからだろうか。森端さんは自然と向き合う農業経営者としての資質をすでに備えているように見える。

将来はペルーの研修生を
この畑に受け入れたい

ペルーにも桃の樹があり、日本のものより小振りな実をつけるそう。「ペルーでも、日本の桃を育てられるはず。ゆくゆくは、日本の農業技術を学んでもらうためにペルーの若者を受け入れることができれば」と森端さん。和歌山県・紀北のフルーツ栽培は全国でもトップクラスの技術を誇る。「まずは自分が果樹栽培の技術

3月にする、桃の蕾を間引きする摘蕾作業。花が咲けば、摘花作業もする。



桃の旬は6月下旬~8月中旬頃。シーズンオフは、瑞々しさを詰めた手づくりジャムで楽しむ。

を身につけて、地元へ恩返し。そして、農業を通して第2のふるさとペルーにも恩返しをしたい」と森端さんは熱く語る。日本のブランド桃の栽培技術が、海を超えて地球の裏側でも根付く日は、遠くはないのだろう。

ペルーの人は柔軟、かつ クリエイティブだった

南米ペルーで2年間、環境教育分野で活動した森端さん。苦勞したのが教えたことの継続だった。「ゴミの分別がない地域で分別回収を始めたのですが、急に市役所の職員が配置換えとなり、しかも同僚の回収スタッフは3カ月ごとに入れ替えとなる。教えても教えてもノウハウが蓄積されず、もどかしさがありました」と当時を振り返る。そこで森端さんは、まず住民にゴミの量を減らすことの説明から始め、回収車の運転手だけは継続雇用してもらうよう直談判し、少しずつ周囲に分別回収の必要性和ノウハウを説いた。「逆に僕が感動したこともあります。リサイクル品の回収



リサイクル施設(保管庫)の中で、手作業でゴミを分別していく。

に土嚢袋を使っていたのですが、大きさが足りなくなった時、現地の人たちは袋を解体して2つを合わせて縫い大きな袋を作ってくれたのです。無い物ねだりをせず、有り合わせで工夫する忍耐とアイデアを豊富に持っている。日本にはない豊かさに触れた瞬間だったと森端さんは語る。

地域の家庭を1軒ずつ訪れてリサイクル品を回収。運搬車に乗せる。



青年海外協力隊を目指すみなさんへ

社会経験がなくても 積極的に参加してください

「社会経験がないと協力隊での活動ができないのではないかと、応募を躊躇する人もいるかもしれませんが、社会経験がない人でも活動に飛び込んでいいと僕は思います。『意気込み』や『勢い』も必要。現地で自分が何をやれるかを探していくのも、一つの方法です」

生きていく上での たくましさ 子どもたちに伝えたい

新江 涼加さん

しんえ すずか

赴任地

セネガル

赴任地での職種(活動分野)

小学校教諭

和歌山県・和歌山市
藤戸台小学校

大学卒業後、和歌山市の小学校教諭として3年間勤務。現職教員特別参加制度で協力隊に参加し、アフリカ西部のセネガルで小学校を巡回し、情操教育の授業指導を行う。和歌山市内に戻り、2014年春から市立藤戸台小学校に勤務。5年生担任。

現職で協力隊に参加 日本の良さを改めて実感

教育分野でのスキルを国際協力に活かしたいと、小学校教諭として現職で協力隊の活動に参加した新江涼加さん。赴任地である西アフリカのセネガルでは、音楽や図工などの情操教育を中心に指導にあたった。帰国後はすぐに職場復帰し、和歌山市内の小学校に勤務している。異国での教育活動は、それまで当たり前だったことをいくつ

も覆したと語る。「例えば、日本の教育の良さの一つに系統立てたカリキュラムがあり、先生方も真摯に取り組んでいます。セネガルではカリキュラムが終了しなくても知らん顔の先生も…。海外に出て改めて日本の教育環境のレベルの高さを認識しました」。

セネガルの小学校を訪れてみると、子どもたちにクラスへの帰属意識は少なく、語学と算数の学習を行っているだけの状態だった。そこで新江さんは、日本で大事にされている「学級経営」を

セネガルで感じた 生き抜く力と学びの原点

取り入れることを試みた。「例えばクラスでルールや目標を作ったり、それを守ったりするもの。クラスの一体感を高めることで学習効率も上がるからです」。そしてセネガルの子どもたちは、「勉強して賢くなること」をクラスの目標に掲げた。勉強ができればお金を稼げるようになる、学ぶ目的が明確なのだ。「学びに対するハングリー精神は、逆に日本の子どもたちには足りない部分。帰国後は『なぜ学校に行くか』も

意識しながら指導にあたっています」。

今後子どもたちに伝えていきたいことは何かと尋ねると、新江さんはセネガルで知った「たくましさ」と答える。「やりたいことを見つけ、それを実行する力と精神力を備えてほしい」。



5年生の担任4名で漢字テストの結果を確認。意見を出し、統一の方針を決めていく。



社会の時間に子どもたちが作成した新聞の解説をする新江さん。

同僚に
聞く!



和歌山市立 藤戸台小学校勤務 成戸 秀和さん

新江先生は行動力がある人。教育現場では数名のグループで活動することも多いのですが、その中でしっかりとポジションを考えて行動してくれま。セネガルでの経験は他の人にはない貴重なもの。そのスキルをぜひ活かしてほしいです。

あるもので何とかする… 貴重な経験はこれからの糧に

新江さんが赴任したのは、セネガルの小さな都市ファティック市。活動の中心は、音楽・図工・体育など情操教育の指導だった。「鍵盤ハーモニカの弾き方を教員に教え、教員から子どもたちに指導してもらおう。子どもたちもそのメロディを口ずさんでくれて、うれしい流

れをつくることができました」。一方、図工の時間を設けてリサイクル工作を試みたが、古新聞は市場で売られる貴重品、ペットボトルも一般家庭にないという状況。そこで、近くにある服の仕立て屋さんで端切れをもらい、カラフルな創作物を作ることに。「現地では、あるものでなんとかする術を身に付けました」と話す。そして、「語学は試験のためでなく、コミュニケーションの手段であることを協力隊の2年間で身をもって学びました。まだ外国と接する機会の少ない子どもたちに、語学を学ぶ楽しさを伝えていけたら…。自身の体験は今、教育の現場で活かされている。



現地の教員が子どもに鍵盤ハーモニカの弾き方を教えている。



絵や工作の授業を楽しむセネガルの子ども。ハサミを初めて使う子どもも多かった。



青年海外協力隊を目指すみなさんへ

自分を探しに 日本を飛び出してみよう

「協力隊の参加は、その後の生き方に大きく影響するほど有意義なものになりました。多忙な中でも心のゆとりを持てるようになったのも、協力隊の経験があったから。迷っているなら進んでみては。行く先の国できっと、自分を見つめることができます」